

大草谷津田いきものの里 自然観察会

ハチにも いろいろありまして

山口 由富子（市原市）

日 時：2013年8月4日（日）10：30～12：00 天候：晴れ

参加者：12名（大人9名 子ども3名）

担当指導員：田島 正子・山口 由富子

観察会の題名は、ソフトなものだったが、田島さんが設定した内容は、個人的には初めてとなるハチの世界への導入だったので、みなさんの反応を想像しながら、私のほうがワクワク、ドキドキのオープンとなった。

まずは、ハチの顔や体の特徴を絵から学び、次に19種類のハチとハチに擬態している昆虫（ハナアブ、カミキリ、ガ）の写真を並べ、その中からハチと思うものを、参加者が順番にピックアップしていく。最後に、どれがハチでない昆虫かを明かし、擬態という生き様に納得。さらに、仲間分け（広腰亜目と細腰亜目）をし、その進化や特徴について説明。ハチの多様性について言及するという、少々マニアックだったかもしれないが、おとなたちの眼は輝いていた。そのなかで、ハチの98パーセントは、刺さないハチという説明には、意外というか安堵の表情が。そして、刺すハチ（スズメバチ、アシナガバチ、ミツバチ、マルハナバチ）は、集団生活をするハチで、とくにスズメバチは強い毒をもち、ある種の規則に則って行動する。季節や環境によっては人間を襲うので、くれぐれも刺されないように注意することを、改めて告げた。

フィールドに出る前に、細い竹筒を束ねて「蜂宿」を作っておいたものを取り出し、筒を割って中身を確認してみた。ガの幼虫が出てきた巣、ルリジガバチがたくさんクモをエサとしてため込んでいた巣、寄生バエの蛹がころころと転がり出てきた巣など、ふだんは見ることのできない狩蜂の工夫の様子を観察することができた。

道中では、クロスズメバチがセミの死骸を肉団子にしている現場を目撃。多くの方が初めて観るということで、その体型や体色に「え、これがスズメバチ？」と、いわゆるスズメバチではない風体に驚いているようだった。ほかに観察できたハチはキイロスズメバチ、サトジガバチくらいだったが、タマムシ、ショウリョウバッタ、ヤマタニシ、ナガコガネグモに次いで、ジャコウアゲハが、成虫が飛んできて葉裏に卵を産卵、白黒ツートンの幼虫、そして黄金色（？）に輝く蛹など、その一連のストーリーを同時に観察できたことに、多くの方々の感動の声が湧いた。

まとめでは、ハチは食物連鎖のなかで大切な役割（昆虫を捕食）を果たす生き物で、もし、昔のニホンオオカミのように人や家畜を襲う悪い生き物として、全滅させてしまえば、今までの自然界の調和は保たれなくなってしまうかもしれない。

ミツバチの蜜を集めるという習性のおかげで人はその恩恵を受け、その流れの中で蜜源の花木が守られていく。自然の中に無駄な命はひとつもないように、それぞれの使命を帯びてたくさんの生き物が息づいている。人もその中の一種の生き物として、自然と調和のとれた生き方をしたいものですね と結んだ。



ジャコウアゲハのサナギ